東京2020パラリンピック
あらゆる壁を越えて、さらにひとつへ

8月24日㈫、東京2020パラリンピックの開会式が行われます。本市は、セルビア共和国を相手国として、パラリンピアンの受入れを契機に心のバリアフリーやユニバーサルデザインのまちづくりに取り組む「共生社会ホストタウン」に登録されています。本特集では、本市から選ばれたパラリンピック聖火ランナーや過去の大会のパラリンピアンなどにお話を伺い、共生社会の実現への手がかりを考察します。

問 文化・スポーツ振興課 オリンピック・パラリンピックグループ ☎㈹630

8月19日㈭ 支え合って走るパラリンピック聖火リレー

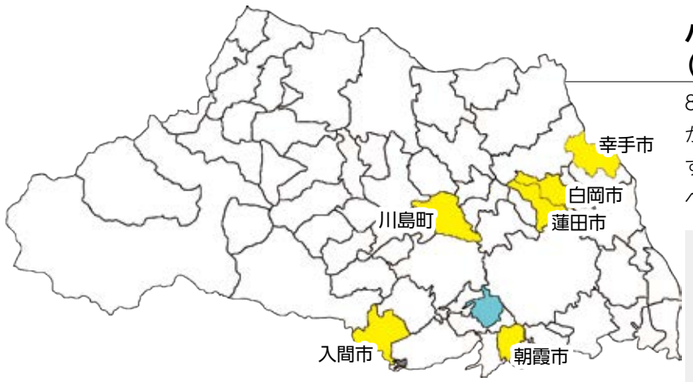
東京2020パラリンピックの開会式に先駆け、8月19日㈭に埼玉県のパラリンピック聖火リレーが実施されます。会場となる幸手市・蓮田市・白岡市・川島町・入間市・朝霞市の6自治体を走る47人のランナーの中には、本市在住の手島凛さんがいます。

「東京2020パラリンピックの聖火リレーは、3人1組で助け合いながら走ります。1人だと何かと手助けが必要な僕ですが、協力すればどんなことだってできるんだっていうところを見せられたらと思っています」

脳性まひにより身体に障がいがある手島さんは、障がい者スポーツであるボッチャ（写真）や演劇など、興味のあることには臆せず挑戦してきました。直接的にはできないことがあっても、「どうしたら自分にもできるのか」を模索し、実現してきました。例えば、人形劇に挑戦したときは、人形を動かす役割は担えないため、朗読をする係を務めたり、始めようと思った車いすサッカーが自分には難しいとわかればボッチャに変更して打ち込むなど。「大切なのはコミュニケーションだと思っています。いろいろな人と話をして互いに情報を共有すれば、できなかったことができるようになったり、別の方法が見つかったりして、障がいの有無を超えて学び合えます。僕が走ることも、観覧してくれた方の学びや気づきにつながればうれしいです」。手島さんの積極的な姿勢は、私たちに対話の大切さを気付かせてくれます。

ポピュラーな障がい者スポーツ「ボッチャ」

聖火ランナーに選出された
手島（てじま） 凛（りん） さん



パラリンピック聖火リレー（埼玉県）

8月19日㈭、3人1組のランナーが県内6自治体を走ります。詳しくは県ホームページをご覧ください。

第1区間：幸手市
第2区間：蓮田市・白岡市
第3区間：川島町
第4区間：入間市
第5区間：朝霞市

8月24日㈫ 東京2020パラリンピック開幕

さまざまな障がいのあるアスリートたちが、公平に個性や能力を生かして競技を行う世界最高峰の競技大会であるパラリンピックがいよいよ開幕します。コロナ禍（か）により交流ができないため、市には来訪しませんが、セルビア共和国からも多くの選手が栄光を目指して来日します。ここでは、ロンドンパラリンピック視覚障害者柔道で5位に入賞した、本市在住の高橋秀克さんにパラリンピックへの想いを語っていただきました。

「試合場に上がるときの大きな声援と高揚感は今でも忘れられません。ロンドンの街は大会を盛り上げるために一丸となっていて、多くの現地の方にお声がけをいただきました。皆さん『パラリンピックは障がい者だけのイベント』と捉（とら）えておらず、障がい者・健常者の心の垣根がないと感じました」と振り返る高橋さん。大会開催の意義を「自身の障がいを受け入れるのは難しいことですが、パラスポーツの選手はそれを受け入れたうえで、『やるかやらないか』を『やる』と決めた挑戦者で、創意工夫と努力で超人的な結果を出しているのです。それは身体的な素質より大切な部分です。もちろん『どうしてもできない』という状況もありますが、さまざまな状況にある方に『自分にもできるのではないか』という希望を発信できることがパラリンピックの最も大切な部分なのだと思います」と語りました。パラリンピアンの活躍が、私たちの心を奮い立たせてくれます。

リオデジャネイロパラリンピックパラ卓球金メダリストの
ボリスラヴァ・ペーリッチ・ランコヴィッチ選手

本市と姉妹都市提携を締結しているシャバツ市出身の
ミタル・パリクチャ選手

高橋 秀克 さん
ロンドンパラリンピック
視覚障害者柔道5位入賞

東京2020パラリンピック聖火ビジット開催

パラリンピック聖火リレーの開催にあわせた聖火の訪問イベントです。専用のランタンに分灯された聖火を展示します（申込不要）。

とき／8月19日㈭正午～午後7時
場所／市民総合体育館

聖火が灯されたランタン

共生社会の実現のために

富士見市ホストタウンアドバイザー
上原 大祐（だいすけ） さん

元パラアイスホッケー日本代表。2006年トリノ大会、2010年バンクーバー大会、2018年平昌大会に出場し、バンクーバー大会では銀メダルを獲得。引退後は、さまざまなスポーツ体験やワークショップへの講師の派遣などを行う「NPO法人D-SHiPS32」の立ち上げとともに、国土交通省バリアフリーアドバイザーなどとして活躍中。

さまざまな立場にある人が互いに理解しあえる社会を確立するために大切なことは何か。本市のホストタウンアドバイザーである上原大祐さんにお話を伺いました。

「共生社会」から「共有社会」へ

カナダにパラアイスホッケーの試合に行った際、会場で障がいのある子どもたちがすごく楽しそうにアイスホッケーをしていて、そしてそれを見ていた保護者がとても幸せそうにしている姿がありました。そこで、スポーツは障がいのある当事者だけでなく、その周囲の方も幸せにする力があることに気付かされ、パラスポーツの普及啓発活動を始めました。

私には変えていきたいことがあります。1つ目は、「障がいがあるからできない」という当事者本人や家族の意識。2つ目は、障がいの有無で同じ時間や空間などを共有できないことです。

1つ目については、実体験からお伝えすると、パラスポーツ選手は、自らの弱みではなく、強みを最大限に生かして競技に臨んでいます。「できないこと」を「どうしたらできるのか」とポジティブに考え、チャレンジしてきました。そんなアスリートが世界中から集まるのがパラリンピック。東京2020パラリンピックはそのような意識を育む絶好の機会です。出場する選手がどのような工夫をして人間の限界に挑んでいるか。本大会ではこの部分に着目して観戦していただき、人間の無限の可能性を感じてもらいたいと思っています。

2つ目は、例えば「障がい者は利用できない施設」があるなどといった制限の問題で、障がいの有無を超えた相互理解を遠ざけている大きな要因と言えます。人は、他者と自分との違いを見つけると、例えば「健常者・障がい者」「男性・女性」「若者・高齢者」などと分類してしまいがちで、同時に生活スタイルも別々に分けられてしまうことがあります。その分類を適切に取り払っていくのが「共生社会」ですが、これは少し伝わりにくい言葉だと思いますので、「共有社会」という言葉に置き換えるといかがでしょうか。障がいの有無に関わらず同じ時間・場所・楽しさや感動を共有できれば、自ずと相互理解が進むはずです。

共有社会を実現するには、教育が重要だと考えています。体育の授業にパラスポーツを取り入れたり、障がいのある方と共同で活動する時間を作り、障がいの有無を越えて友達になれるような取組みが望ましいですね。

富士見市は共生社会ホストタウンに登録され、相互理解を目指す取り組みが実施されてきました。これをパラリンピックに付属した一過性の出来事にならないよう、共有社会が日常化することを目指してほしいと思っています。

一つの社会の中で生きる私たちがもっと一つになるためのヒントは「同じ時間、同じ場所、同じ楽しさや感動を共有する」という、人と人との自然なつながりを再構築することなのかもしれません。

令和2年10月開催のスポーツ指導者養成講座の中で行われた、上原さんが講師を務めた車いすハンドボール体験。

市内の保育所の子どもたちがパラリンピックセルビア共和国代表選手にプレゼントするために作った、メダルを模した首飾り。

共生社会ホストタウン

共生社会ホストタウンとは、海外のパラリンピアンを迎えることなどをきっかけに、ユニバーサルデザインのまちづくりと心のバリアフリーに向けた、自治体ならではの特色ある施策の実施を促す国の取組み。

富士見市は、東京2020オリンピックと同じく、セルビア共和国の共生社会ホストタウンに登録されている。